

花山信勝君著

聖德太子御製

法華義疏の研究に對する授賞審査要旨

本論は聖德太子著法華經義疏及帝室御物御自筆本義疏の外形内容全般に亘る一大研究にして、聖德太子奉讀會の特選研究員として攷究したる結果を東洋文庫に於て刊行せしものなり。太子の義疏は我國漢文渡來以後最初の撰述にして、日本文化初期の産物たるものなれば、夙に研究せらるべきものたるに係らず、未曾て全般的研究を試みしものなく、帝室御物たる御自筆本の學界に紹介せられたるも、近年に屬するを以て、その果して太子の御自撰か御自筆か否か等の問題に就ても世間尙ほ疑を挿む者なきにあらず。著者は先づ三經義疏太子撰述の眞否より論を起し、外形内容の各部に亘り微に入り細を究めてその研究を完成せり。

本論は全六篇より成り、第一篇聖德太子の三經義疏序論、第二篇御草本法華義疏の研究、第三篇太子御所依の法華經原本の研究、第四篇法華義疏釋の傳承關係附太子の批判と御自釋、第五篇太子法華義疏と法雲法華義記との法華經科文の對比研究、第六篇法華義疏に現はれたる太子の佛教附錄法華義疏研究梗概を以て完結し、附するに法華經科文の對比研究圖表四十六表を以てす。

第一篇に於ては、三經義疏の太子の眞撰なることを論じ、御製作の順序を勝鬘經維摩經法華經の次第とし、特にこの三經を御選定ありし理由を當時大陸に於ける佛教研究の反映となし、詳細にこれを

立證し、終に三經間相互の關係に就き、太子は法華經に最も重きを置かれたることを指摘せり。

第二篇に於ては、帝室御物本法華義疏と民間流布本法華義疏（寶治本、明曆本、天和本、大正三本）との比較の結果に依り、一切の流布本は一元に歸し、その最初の底本を明かに現御物本たりしを立證し、尙流布本に於ける多々の誤謬を訂正し、結局御物本法華義疏は聖德太子御親作御自筆御草本なることを、改補修正貼紙等の施されたる諸點に就き詳細に論究して、その補正點は太子獨自の御説を發表せられたる場合にして、補正なく運筆自由なる諸點も亦太子の自説發表の場合なることを示し、其他の修正點に就ても、細かに太子苦心の跡を列舉し、尙その修正は御草文中のものと御草文後のものとあり、又未修正の點もあり、更に後人加筆の跡若干あることを示せり。

第三篇に於ては、從來傳へ來りし法華經三本説を非認して、羅什譯法華經八卷二十七品の經一本たりしことを説き、更に法華義疏に顯はるゝ法華經を研討し、内容各品に亘りて精密にその引文に依りて對比し、結局太子御所依の法華經本と現行の法華經本とは三本に非りしことを示せり。

第四篇に於ては、光宅寺法雲の法華義記を本疏、本義、本釋として採用せられたる程度を明にせんとして、本篇中凡一百四十頁に亘る對照を爲し、遂に主として法雲義記を依用せられ、併せて他の數疏を參照せられたることを立證せり。而も太子の義疏は單なる依用に非ずして、これを批判し取捨し、別に太子獨得の解釋を表明せられたることを詳述し、法雲義記と太子義疏との相違點を指摘し、太子

義疏の特徴を拮拾すること一百點に及びて、太子の御自説を詳論したり。

第五篇に於ては、法華經本文分科の點に就て、依用の法雲義記と太子義疏とを對比考查せり。これには別冊として科圖四十六表を附し、煩瑣なる分科を詳述したり。

第六篇に於ては、太子の思想と信仰とは、當時に於ける支那大陸朝鮮半島竝に本邦移入文化の粹を集めたるものにして、それは同時に當時の日本に於ける哲學宗教實踐倫理の原理たりしものなりとし、而して太子の三經義疏は斯る佛敎を表明するものとして、奈良朝以前の精神文化の基礎的文獻たり、三經義疏の中法華義疏は太子が最も重きを措かれたるものなれば、これを通じて太子の佛敎を觀るを必要とし、第一敎判思想、第二無相と實相、第三現實の無相、第四理想の佛果、第五實踐の道の各部門に亘り、太子獨得の解釋が後の日本佛敎の指導たりしことを論述せり。

要するに本論は、日本文化の振興に活躍ありし聖徳太子の最大著述たる法華義疏の全面的研究なり。義疏は太子の抱懷せられし理想と、爾後の日本佛敎を指導したる根本敎理とを窺知すべき基礎的文獻にして、文化史思想史に於て逸すべからざる好資料たれば、その考證檢討の純學術的たるを公平細密且徹底的たるべきは必須の要件なるが、著者は此等の諸點に着目して、太子獨創の識見、解説、批判、意趣等を指摘するに努め、最後に太子の佛敎理想を擧示せり、但し太子の思想を一層組織的に究明する點に於て多少の遺憾あるも、著者は本研究に於て其の基礎を完成せりと謂ふべし。尙本論に

於ける研究に依りて安全に肯定し得るものは (一)勝鬘、維摩、法華三疏は太子の御親作なること、(二)寶治本法華義疏は慥に太子御草本を摸し刊行したるものなること、(三)太子御草本とは帝室御物本法華義疏なること、(四)御物本法華義疏は慥に御草本にして且御自筆本なること、(五)太子の法華經本は現存の羅什譯法華經と異り、羅什譯八卷二十七品の古本なりしこと、(六)古傳の太子の法華經三本説(落字本、妹子請來本、夢殿感得本)は非にして、唯一本のみなりしこと、(七)法華義疏には法雲義記を主として用ゐられ他の數疏を併用せられしも、特徴ある獨創説を多分に含めること、(八)太子の佛敎は太子獨得のものにして、法華の一大乘敎を理想とせられたるものなること等の諸點なりとす。